

## 修士論文要旨

# 真宗寺院における高齢者介護についての一考察

荻 野 龍 裕

目 次

序 論

本 論

第一章 高齢化する社会

第一節 高齢社会の現状と今後

第二節 高齢社会の問題点

第一項 健康寿命と平均寿命

第二項 高齢者の社会的孤立、閉じこもり

第三項 介護予防の必要性

第三節 地域包括ケアとビバーラ活動

第二章 高齢者介護における自立

第一節 介護の定義と自立

第二節 高齢期における心理的課題

第三章 寺院活動と高齢者介護

第一節 高齢者介護と仏教思想

第二節 高齢社会に対する住職、坊守の意識

第三節 寺院に対するイメージ

第四章 釈尊、親鸞にみる「老い」の捉え方

第一節 釈尊にみる「老い」の捉え方

第二節 親鸞にみる「老い」の捉え方

第三節 「老い」から宗教的目覚めへ

第五章 寺院における高齢者介護の事例研究

第一節 介護予防活動の事例 浄光寺「在宅療養者のつどい」

第二節 介護保険サービスの事例 善了寺デイサービス「還る家ともに」

第三節 事例の考察

結 論

## 序 論

今日、深刻な高齢化が進行している。高齢者の割合が増加していく社会において、高齢者が

安心して暮らすことのできる社会を構築していくことは必須の課題である。それは一体どのような社会であろうか。それにはまず、老いによって何が問題となるのかを考えなければならない。そうすると、一番初めに考えられるのはやはり老いに伴う身体的弱体化の問題である。釈尊が諸行無常を説いたように、すべての物は移り変わり、永遠に変化しないものはない。人間もまた老いに伴い体の自由が効かなくなり、今までできていたことができなくなり、それまでの日常生活に支障をきたしていく。

しかし、たとえ老いによって自身の体の自由が効かなくなった場合も、他者の手を借りることによってそれを少なからず緩和することができる。これが一般的に言われる介護である。一般的に介護は「高齢者・病人などを介抱し、日常生活を助けること」と定義される。しかし、福祉活動における専門的な介護の定義としては、“自立の促進”ということも含まれる。ただ単に身体的援助をすることだけが介護ではなく、精神的、あるいは社会的な援助も介護の重要な役割なのである。

高齢者を介護する場面は、今後の高齢化率の増加とともに必然的に増加していく。そして、介護が必要な高齢者に対してのアプローチだけではなく、高齢者がさらに高齢化していく社会において、要介護状態となるのを予防する、いわゆる介護予防活動も重要であると考え。今後、高齢者介護という活動が幅広く行われていかなければならない。

そこで、高齢者介護を行う場所の一つとして、寺院という場を利用、活用していくことが有効的であると考え。寺院は、本堂などのある程度空間が確保された場所であり、さらに宗教的要素をふまえた介護活動を実施することで、老いの問題に、身体的側面だけでなく精神的側面からも関わっていくことが可能であると考え。よって、本研究では、高齢社会の現状と今後、そして問題点をふまえ、寺院という既存の場を活用した高齢者介護活動の有効性と可能性を考察する。

## 本 論

我が国では高齢化が進行し、高齢者の割合が全体の24.1%（2012年10月1日時点）であり、今後も高齢化は進行していくとされている。そのような状況の中、高齢者に対する介護活動、また介護予防活動は必須である。そこで、寺院という既存の場を利用して介護活動を行うことが有効的であると考え。

まず、高齢社会の問題点として、本研究では高齢者の生活に焦点を当て、大きく3つの問題を取り上げている。

1つ目に健康寿命（介護の必要がなく健康的に生活できる期間）と平均寿命の差の拡大である。これにより、人生において医療や介護にかかわる期間が長くなってきていることが示され

る。2つ目に、高齢者の社会的孤立、閉じこもりの増加である。孤立、閉じこもりは身体的にも精神的にも健康状態を悪化させていくことにつながる。またこの問題により、現代社会における地域関係の希薄化がみえる。そして3つ目の問題は、今後の後期高齢者（75歳～）の増加に伴い、要介護状態となる人が急増する見込みであることである。この問題を早い段階からの介護予防の活動によって対応せねばならない。

以上の3つの問題点を示したが、このような状況にアプローチしていくためには、高齢者の身体的な援助だけでなく、精神的、社会的な援助も含めた、地域ぐるみの包括的な介護活動が必要であることが分かる。それには、医療、福祉、仏教などさまざまな分野が連携し取り組んでいかねばならない。これについては「地域包括ケア」、「ビハラー活動」という他分野との連携を図った福祉のアプローチが推進されている。高齢者介護活動に寺院が介入していく意義は十分にあると考える。（第一章）

高齢者介護という言葉を考えて場合、単に身体的援助のみを指すのではなく高齢者の自立の促進、援助を促すための、精神的、社会的援助も必要である。高齢期には、実に様々な変化が訪れる。身体の老化、仕事関係など社会的なつながりの消失、生活スタイルの変化、家族との関係の変化などである。高齢期における心理的な視点において、このような多様な変化を受け入れていくこと、つまり「老いの受容」が高齢期においては重要であるといえる。そして、高齢者の自立の促進、援助を考えて場合、それをサポートする役割も高齢者介護には含まれているのである。（第二章）

我が国の高齢者福祉の歴史をみると、その発祥は聖徳太子が仏教の「福田思想」を基に四天王寺に建立されたとされる四箇院がある。病者や貧窮孤独者、高齢者などを救済する場として建立された。福田とは、貧窮孤独者あるいは高齢者という田んぼに種をまき、やがて芽が出て実りが得られるということで、貧窮孤独者に対して何かしらの援助を行うことで、やがてその実りが自分に福をもたらしていくという思想である。

福祉活動においては、する側、される側という関係ではなく、いかに両者が対等な関係にあるかが重要となる。福祉活動の発端が福田思想のような仏教的な考え方からであるとする、仏教における平等観が福祉活動にも生かされるべきであるし、寺院の活動として介護を行うことで平等観に基づいた本来の介護活動のあり方を高齢社会に示すことができ、またそれを実現していくことが可能であると考ええる。

寺院を護持、運営している住職、坊守、あるいは門徒の社会に対する関心はどのようなものであろうか。「第9回宗勢基本調査」によると、社会活動の活動と関心には住職、坊守、門徒ともに“高齢社会について”が一番多く、また、現在の困りごとは、住職、坊守ともに“門徒の高齢化”が挙げられている。このような現状、意識の中、どのような寺院活動が有効的なもの

かを考えた場合、今後ますます進行していく高齢化に向けて、数多くいる、社会活動の参加意欲のある元気な高齢者には役割の一端を担ってもらうことが有効的ではないかと考える。

内閣府と高齢社会NGO連携協議会（高連協）が主催している「高齢社会フォーラム」では2012年度のキャッチフレーズとして“高齢者（シニア）の社会参加が世の中を変える”が挙げられた。これまでの世間の認識は、年齢によって一律に65歳以上の者を高齢者と位置づけ、「支えられる人」と捉える傾向にある。この認識を改め、活躍している人や活躍したいと思っている人に誇りや尊厳を持って、高齢社会の重要な支え手、担い手として活躍してもらうことが必要となる。

現在の寺院活動の状況を見ると、儀式や法要などの活動が主となり、福祉活動があまりなされていない状況にある。そんな中、寺院に対して、介護や死の看取りなど、老・病・死に関わる取り組みを求める声も多い。寺院の公益性に対して、本当に寺院が公益的な活動を行なっているのかという疑問もある中で、地域社会のニーズをくみ取り、積極的に福祉活動を行なっていくべきであろう。（第三章）

ところで、老いの問題と一言で言っても、単に加齢に伴う身体的問題だけではなく、老いそのものに対する不安や受け止め方など、つまり精神的問題も内在しているのである。こういった老いに対する精神的問題に対して釈尊、親鸞はどのように捉えているのかをみていった場合、共通点として、老いをありのままに受け止めているという「老いの受容」が挙げられる。老いの身体的変化だけでなく、死に向かう段階であることもたんと受け止めているのである。そして、この老いをありのままにみる行為は、いつまでも若く、健康でありたいなどという煩惱をながめ、自己内省していく行為ともなるのである。この自己内省がまた、仏法を聞き、真実を追い求めていく機縁となりうるのである。（第四章）

## 結 論

以上指摘してきた通り、寺院における高齢者介護活動は、大きく、以下の3つの点で有効的であると考ええる。

1つ目に高齢者の増加、介護活動の需要などの、“高齢化が進行していく社会のニーズ”。2つ目に高齢社会に対する関心、門徒の高齢化の悩みなどの“寺院側が抱える問題意識”。3つ目に寺院数、空間の広さ、宗教的要素による精神的アプローチなどの、“寺院の持つ潜在能力”である。これらを考慮すると、寺院における高齢者介護活動は現代そして今後の高齢社会に有効的な寺院活動であると考ええる。

## 〈参考文献〉

- R. J. ハヴィガースト著 児玉憲典、飯塚裕子訳『ハヴィガーストの発達課題と教育—生涯発達と人間形成』川島書店 1997
- 浅井成海編『日本浄土教の諸問題』永田文昌堂 2011
- E. H. エリクソン, J. M. エリクソン, H. Q. ギヴニック著 朝長正徳、朝長梨枝子訳『老年期—生き生きしたかかわりあい』みすず書房 1997
- 一番ヶ瀬康子監修・高橋史子『デイサービスセンターの今日と明日』一橋出版 2002
- 梯實圓『聖典セミナー歎異抄』本願寺出版 1994
- 北川順也『お寺が救う無縁社会』幻冬舎ルネッサンス 2011
- 小池妙子『社会福祉選書12 介護概論』建帛社 2002
- 是枝祥子・渡辺裕実『ソーシャルワーカーのための介護』有斐閣 2002
- 佐藤信人『ケアプラン作成の基本的考え方』中央法規出版 2008
- 澤田信子・西村洋子編『新・社会福祉養成テキストブック12 介護概論』ミネルヴァ書房 2007
- 社会福祉士養成講座編集委員会『高齢者に対する支援と介護保険制度』中央法規出版 2009
- 浄土真宗本願寺派『宗報』第533号「第9回宗勢基本調査報告書」本願寺出版社 2011
- 末木文美士『近世の仏教』吉川弘文館 2010
- 鈴木隆雄『超高齢社会の基礎知識』講談社 2012
- 高橋卓志『寺よ、変われ』岩波書店 2009
- 竹内孝仁『介護予防研修テキスト』社会保険研究所 2001
- 辻善之助『慈善救済史料』金港堂書籍 1932
- 中村元『「老いと死」を語る』麗澤大学出版 2000
- 中村元『ブッダの真理のことば・感興のことば』岩波書店 1978
- 中村元監修 森祖道、浪花宣明編『原始仏典第7巻中部經典IV』春秋社 2005
- 内閣府編『高齢社会白書 平成24年度版』2012
- 長谷川匡俊『宗教福祉論』医歯薬出版 2002
- 馬場茂樹、和田光一『現代高齢者福祉のすすめ』学文社 2011
- 文化庁『宗教年鑑 平成22年度版』ぎょうせい 2011
- 村田孝次『生涯発達心理学の課題』培風館 1989
- 文部科学省『学校基本調査 平成24年度』日経印刷 2012
- 安村誠司『地域ですすめる閉じこもり予防・支援』中央法規出版 2006

## 〈参考論文〉

- 大住誠「仏教者三人の老い」『思想の科学』55号 1984
- 藤憲之「真宗における「老い」の思想—親鸞・蓮如を中心に—」『印度学仏教学研究』48巻2号 2000
- 小谷みどり「寺院とのかかわり～寺院の今日的役割とは」第一生命経済研究所『ライフデザインレポート』192号 2009
- 佐伯典彦「老人デイサービス利用者への仏教介護的な相談・助言に関する試論」『日本仏教社会福祉学会年報』39号 2008
- 千草篤麿「老人福祉における真宗とボランティア—「うしろめたさ」に関する考察—」『真宗研究』41輯 1997
- 中西智海「親鸞のとらえ方」『大法輪』2008年3月号 2008
- 奈倉道隆「浄土真宗本願寺派のビハラー活動とその現代的意義」『日本仏教社会福祉学会年報』40号

2010

奈倉道隆「長寿社会と仏教福祉—高齢者援助と終末期医療をめぐって—」『仏教福祉』1号 1997

奈良康明「釈尊の捉え方—〈向老〉を生きる」『大法輪』2008年3月号 2008